

あの時の 人

美術と文学を拓いた巨匠たち

江戸時代から、さまざまな文化の華が咲き誇った八女。その伝統を受け継いで、明治以降もさまざまな芸術家、作家が画壇や文壇で活躍してきました。市内にはたくさんの文学碑が置かれているほか、ゆかりの文化人をしのぶイベントも開催されています。

八女の直木賞作家

*直木賞/新人及び中堅作家による大衆小説作品に与えられる文学賞。文藝春秋社長の菊池寛が時代小説の人気作家、直木三十五を記念して昭和10(1935)年に芥川賞とともに創設しました。



五木寛之

小説、評論、エッセイなど多方面に活躍

(1932)
立花町生まれ。福島高校(八女市)時代は、学校新聞を創刊し、自ら連載小説を執筆。昭和42(1967)年に「青ざめた馬を見よ」で第56回直木賞を、同51(1976)年に「青春の門」筑豊編」で第10回吉川栄治文学賞を受賞。また、直木賞をはじめ、多くの文学賞の選考委員としても活躍し現在、新聞小説「親鸞」を連載中。八女市立図書館には五木寛之コーナーがあります。



杉本章子

江戸を舞台にした小説で人気

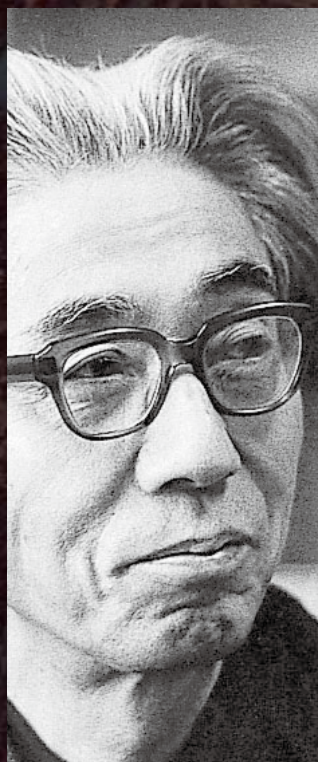
(1953)
八女市生まれ。昭和54(1979)年に大学院の修士論文で扱った儒学者、寺門静軒を描いた小説「男の軌跡」で作家デビュー。江戸を舞台にした時代小説で人気を集め、昭和63(1988)年に「東京新大橋南中図」で第100回直木賞を、平成14(2002)年に「信太郎人情始末帖」シリーズ第一作「おすぎ」で2002年度中山義秀文学賞を受賞しています。



安部龍太郎

歴史小説の時代を担う作家

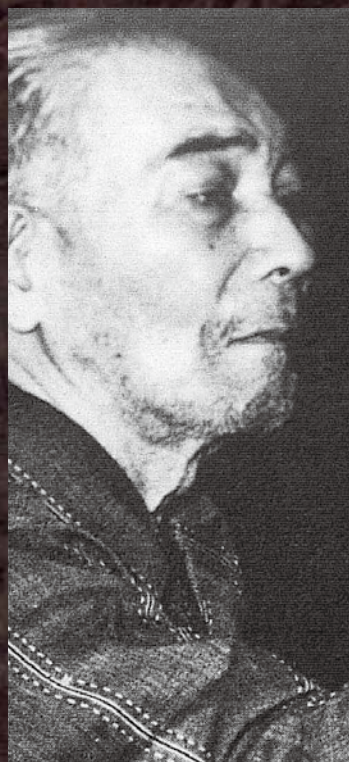
(1955)
黒木町生まれ。図書館司書を勤めるかたわら、数々の文学賞に応募し、平成2(1990)年、「血の日本史」で作家デビュー。平成17(2005)年に「天馬、翔ける」で第11回中山義秀文学賞を、同24(2012)年に絵師、長谷川等伯を主人公にした「等伯」で第148回直木賞を受賞。歴史小説の時代を担う作家として大きな注目を集めています。



山本健吉

古典と現代を結んだ
文芸評論家

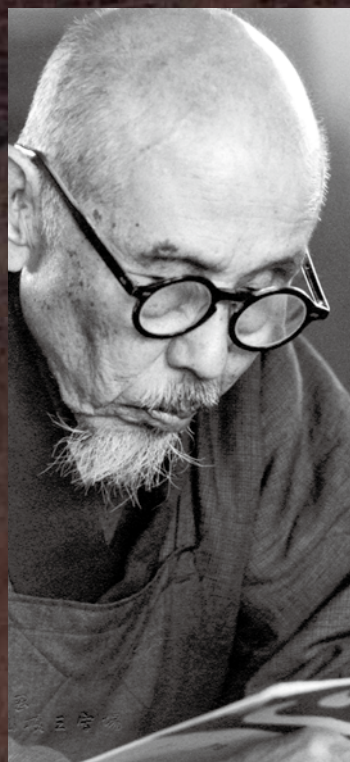
(1907~1988)
豊かな学識を背景に、古典から現代文学まで論じた文芸評論家。黒木町出身の作家・文芸評論家、石橋忍月の子息で、日本文藝家協会の会長を務めました。八女市には墓と妻で俳人の石橋秀野と同じ石を分けあつた夫婦句碑があります。夫婦句碑の建立に際して、親交のあつた歌手のさだまさしさんは「夢しくれ」という曲を作りました。



田崎廣助

日本の山々を描いた
風景画の巨匠

(1898~1984)
自然の風景を日本的な表現で描いた洋画家。立花町に生まれてフランスに学び、有馬生馬を中心とする芸術家団体「一水会」の創設に参加。阿蘇山をはじめ、日本の山を題材にした風景画を得意とし、日展の理事も務めました。立花町ワインセラーには、「田崎廣助画伯ギャラリー」が置かれており、観梅の季節に一般公開されます。



坂本繁二郎

八女の自然と風土を
愛した洋画家

(1882~1969)
久留米市に生まれ、フランスに留学して中間色による独自の色調を身につけました。帰国後、「東洋のバルビゾン」と呼んで八女の自然と風土を愛し、アトリエを建てて38年間制作に励み、郷土文化の発展にも大きく貢献しました。毎年文化の日には、八女公園にある銅像前で「帰居祭」が開かれ、献茶などが行われます。



文化勲章受章者

*文化勲章/科学技術や芸術などの分野で、文化の発展や向上にめざましい功績のある人に授与される勲章。毎年11月3日の文化の日に皇居宮殿松の間で、天皇陛下から直接授与されます。